保育科における教育システムづくりと修学支援の取り組み（Ⅰ）
― 学科教員参加型の研修会の意義について ―

Case Study of an Educational System and Learning Support Environment in Early Childhood Education
― Educational Meaning of Workshop for Faculty Development with Subject Teacher participation ―

杉田律子[1]　日坂歩都恵[2]　福田規秀[3]
石川恵美[4]　井上朋子[5]　山村けい子[6]
半田結[7]　三宅一郎[8]　田中敬子[9]
崎元りずみ[10]　永井夕起子[11]　三宅美由紀[12]
足立法子[13]　野田直恵[14]

（令和２年１月29日受理）

要約

例年、ＦＤ・ＳＤ研修の一環として授業公開が行われているが、授業公開と授業参観した個人の参観シートの提出だけで終わっていた。そのため、2019年度Ⅱ期（後期）に授業公開後に学科ごとの研修会を実施する取り組みを行うこととなった。その取り組みの一環として、保育科においても教員全体の研修会を設定し、保育科の教育力を高める継続的な試みを行っていくこととした。本報告は、その最初の取り組みの手始めとして行った、ＫＪ法を用いた学科全員参加型の研修会を通して、教職員間の問題意識の共有と問題解決の検討の経緯をまとめたものである。今回の研修会は短い時間しか設定できなかったため、議論を十分尽くせなかったが、その短時間の研修を通じ、①大学の設備や制度の不備や②学生の学修意欲や学力の問題など、教員間で多くの問題意識を共有することができた。

今回の研修会の試みによって、教員の個々の努力だけではなく、保育科全体で学生支援に取り組まねばならない、という教員間の共通意識をまず持つことができた。今後も保育科が抱える問題解決を目指した具体的な取り組みを行うため、継続した保育科の研修会を続けていきたいと考えている。

キーワード：保育者養成、修学支援、Ｄ研修会
keywords：Childcare training, Learning support, workshop for Faculty Development

１．はじめに

本学短期大学部保育科は全日二年制課程の第一部（定員100名）と、午前のみ授業の三年制課程である第三部（定員80名）の２つの学科から成り、保育士資格と幼稚園教諭二種免許を取得し、保育現場で即戦力となる保育者を養成することを目指して、日々の教育を行っている。

近年の子育て世代を取り巻く環境の変化により、ますます保育者に求められる専門性は多種多様なものとなっている。

（１すぎたりつこ　保育科准教授　発達心理学・特別支援教育学）
（２ひさかほづえ　保育科教授　幼児教育学）
（３ふくたのりひで　保育科教授　幼児教育学）
（４いしかわえみ　保育科准教授　保育学・幼児教育学）
（５いのうえともこ　保育科准教授　音楽・ピアノ）
（６やまむらけいこ　保育科講師　保育学・幼児教育学）
（７はんだむすび　保育科教授　美術教育学）
（８みやけいちろう　保育科教授　運動発達学）
（９たなかけいこ　保育科教授　音楽・ピアノ）
（10さきもとりずみ　保育科講師　音楽・バイオリン）
（11ながいゆきこ　保育科講師　身体表現）
（12みやけみゆき　保育科講師　幼児教育学・保育学）
（13あだちのりこ　保育科講師　発達心理学・生涯発達心理学）
（14のだなおえ　保育科准教授　日本文学）

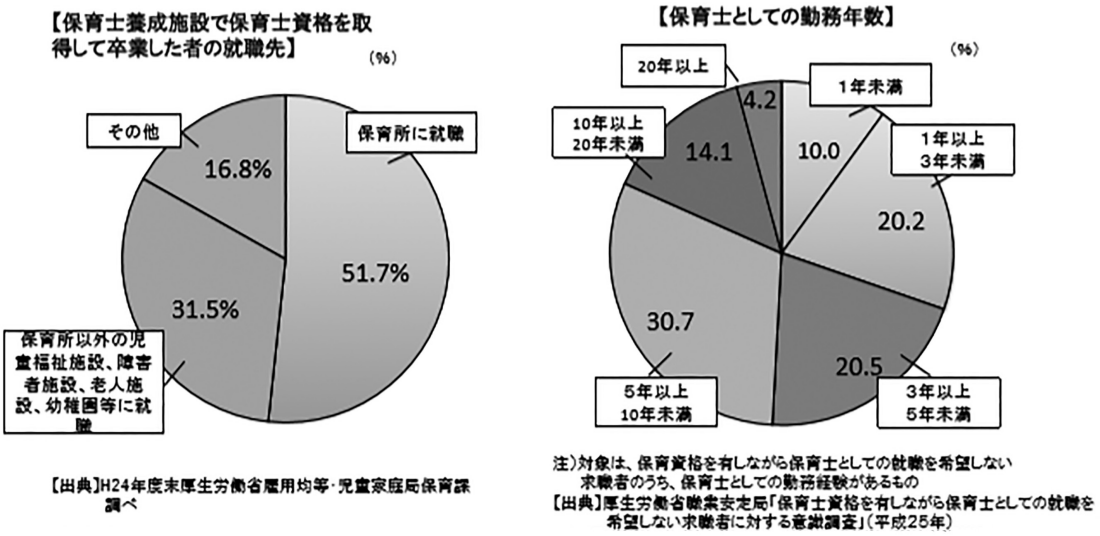

図１　保育士資格を有する求職者の状況[1)]

さらに、子育て世代が安心して子育てを行う環境整備を目指した子育て支援の一環として、保育施設の拡充も求められ、保育者養成の必要性が高まっている。さらに、近年の子育て家庭に対する保護者支援の面からみて、保育者の量だけではなく質の高さも求められている。

そのうえ、現在、保育現場は人手不足であり、そうした状況下で保育者養成校に求められるのは、即戦力となる保育者である。この背景には、厚生労働省（2014）が指摘するように、保育現場は早期の離職率が高く、実際に保育士として働く者は、１年未満が10.0％、１年以上３年未満が20.2％、３年以上５年未満が20.5％と、保育士としての勤務年数が５年未満の人材が50.7％と半数以上を占めており、保育者の半数以上が経験の浅い保育者であるという問題がある。（図１）

また、ハローワーク求職者のうち保育士資格を有する求職者の約半数は保育士としての就業を希望していない。保育士職への就業を希望しない理由として回答に示されるものは、就業継続に関する項目では「責任の重さ・事故への不安」が40.0％と最も多く、また、再就職に関する項目では「就業時間が希望と合わない」が26.5％と最も多い。（図２）

保育者養成施設である本学科でも、在学中に入職に対する不安を取り除くキャリア教育が必要となってくるだろう。また、卒業後のキャリア継続を支援する取り組みとともに、ジョブマッチング制度のような求職者の希望と施設の要望とをすり合わせるような支援が求められるであろう。

次に、図３のとおり、保育士職への就業を希望しない理由として示されるものは、働く職場の環境改善に関する項目では、「賃金が希望と合わない」が47.5％と最も多く、「休暇が少ない・休暇がとりにくい」が37.0％と続く。その反面、保育士職への就業を希望しない理由が解消した場合、63.6％の者が保育士を希望すると回答している。つまり、働きやすい環境であれば保育職を希望する者は多い、と考えられる。このことから、保育者養成校としては、就職活動の際への手厚いサポートのみならず、卒業生サポートの一環として、再就職希望者に対する再就職の職場斡旋を積極的に行うことが望ましいといえる。いっぽう、実習協力施設との共同研修などを通じた、職場の処遇改善や勤務環境の改善への協力といった活動によって、卒業生が働きやすい環境づくりも大切であろう。

産業界との協働や実習等での連携など、地域貢

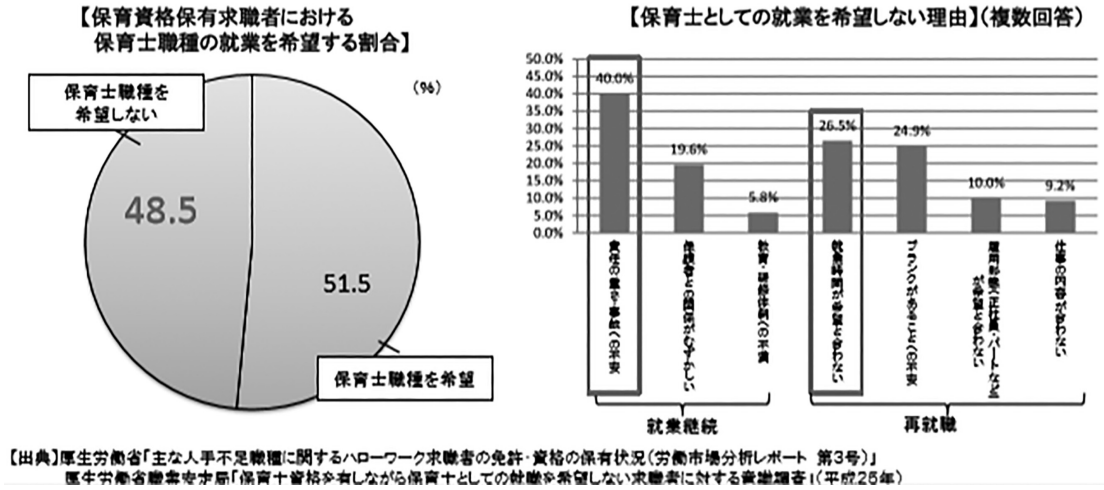

図２　保育分野での求職者が増えない理由①[1)]

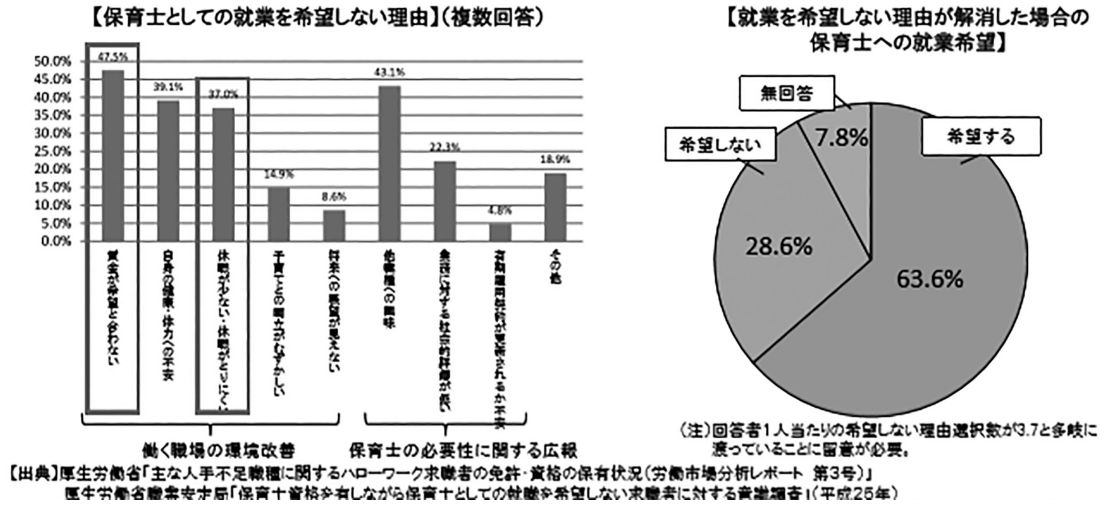

図３　保育分野での求職者が増えない理由②[1)]

献に対する保育者養成校への要請は多い。しかしながら、それらの要請に応えつつ、量はともかく「質の高い」保育者を養成することは、近年の保育者養成校を取り巻く諸事情からは困難となってきているのが現状である。

同じ課題を抱えている本学保育科でも、必ずしも保育者養成の学修基準に足る学力と意欲を兼ね備えている学生ばかりではないという状況下で、学生への修学支援について教員全体で検討していくことが重要であろう。

本学保育科において検討すべき主な問題点は、以下の通りである。

①短期大学の時間的制約

保育科の学生は、保育士・幼稚園教諭二種免許を取得するため多くの科目を学ぶが、短期大学では時間的制約があって学生の必要性に合わせた独自科目を設定する時間的余裕がない。また、特に本学保育科は２年制の教育課程である第一部と３

年制の教育課程である第三部の２つの学科を併設しており、２つの学科の教養共通科目と学科専門科目、さらに実習を教育課程内に置く必要があり時間割上の制約が生じてしまう。これにより、学生のニーズに沿った独自科目を置くことが難しくなっている。本来であれば、学生の興味関心の広がりに対応する多種多様な科目を設定することが望ましいが、時間の制約上困難なのである。

②学修に困難さのある学生の増加

全体の学力や学修意欲の低下､障害のある学生、グレーゾーンの学生の増加傾向が見られ、講義が成立しづらくなっている。しかし、学修意欲の低い学生や専門教育を受けるに厳しい学力の学生に対し、十分な支援を行う体制は整っていない。現時点では、個々の教員が学生に合わせた配慮を行ってはいるが、それらを一括して情報を集約するようなシステムが構築されていないのである。また､教員を支援する体制も整ってはいないため、教員が個々で対応せざるを得ない状況である。

③キャリア教育の必要性

厚生労働省（2014）が指摘するように、乳幼児教育の現場では早期離職率が高い[1)]。そのため、在学中から、資格・免許の取得の支援だけではなく、学生のキャリア教育が重要なもととなっている。また、離職を考える学生についても、相談できる窓口を設けるなど卒業生へのキャリア支援を行えるような環境を整える必要がある。

むろん、勤務を継続しやすい公立の保育所・幼稚園・認定こども園や施設職員を目指す学生に対する、公務員試験対策も重要である。今後は、こうしたことを視野に入れた卒業生支援およびリカレント教育にも力を入れるべきであろう。

④学科体制の不備

現在、学科内の委員会やワーキンググループにおいては、個々の教員がそれぞれに支援活動に取り組んでいる。しかし、上記①～④を改善するための取り組みが学科全体で行われているかというと、学科全体の体制が構築できているとはいいがたい。現状では、教員の授業数の多さや、学生指導の過度な負担などにより、学科全体で検討する時間が持てず、個々の教員が連携できぬままに学生支援を行っている。なおかつ、記録をまとめる時間を十分にとることができないため、教員の指導の成果を学科内で十分に共有することもできていない。

前述の課題に取り組むために、本学保育科は様々な試みを行ってきたが（福田ら，2014)、その後人員予算面での不足が加速し、教育力の面で多くの課題を抱え続けている。そうした中で、学科の教育力を高めるべく、学科内での取り組みを進める必要性を痛感しているところである。

これまでＦＤ・ＳＤの取り組みの一環として、授業公開を行い、互いの授業を参観することによって教授法の研修を行ってきたが、個別に互いの授業を参観しただけでは、時間的余裕のない現在の勤務状態で十分な効果は期待しがたい。学科教員が集まった意見交換の場があれば、そこで議論が深まり、解決策を見出す可能性が生じるであろう。

そこで、今回の授業公開に合わせ、従来どおりに個別に授業を参観するだけではなく、その後に意見交換の場を設けてみた。短い時間の研修ではあったが、まずは保育科の学生の学修にあたっての問題点を、学科全体で共有することから始めることとした。今回の研修会で用いた手法はブレインストーミングとＫＪ法である。

ブレインストーミングとは､基本原則に基づき、問題について自由にアイディアを出し合う手法である。①他人の意見を批判してはいけない、②こんなことを言ったら笑われはしないか、などと考えず、思いついた考えを発表する、③できるだけ多くのアイディアを出す、④他人の意見を聞いてそれに触発され、連想を働かせ、あるいは他人の意見に自分のアイディアを加えて新しい意見として述べる、というものである。

次に、ＫＪ法とは、ブレインストーミングなどによって得られた発想を整序し、問題解決に結びつけていくための手法である。集まったアイディアを論理的に整序して、現在の問題を可視化することで、解決の道筋を明らかにする手法である。問題解決のための討論の場でＫＪ法はよく用いられているが、ＫＪ法には、①「思いつき」を効率

よく可視化できる、②課題を明確にすることができる、③課題に対してさまざまな見解を得られる、④少数意見も考慮に入れることができる、という利点がある。

そこで、今回の研修会では、ブレインストーミングとＫＪ法とを用いて、各教員の日常的に困っていることや問題を感じていることを明らかにし、専任教員間で問題意識を共有して、学生支援についての方向性を打ち出すこと、修学支援の体制づくりを探ることを目的とした。

２．方法

⑴　対象と日程

2019年10月24日３時限時に実施した保育科専任教員２名の授業公開の後、４時限時に学科のＦＤ・ＳＤ研修会の場で保育科の教育についての検討を行った。

研修会の参加者は保育科専任教員15名の全員参加である。討論のグループ人数が多すぎると意見交換がしづらくなるため、専任教員15名を司会１名と、７名ずつの２班に分けてＫＪ法を用いた検討会の場を設けた。研修会90分のうち、初めの15分は３時限時の授業公開についての話し合いの時間に充てため、実質の検討会の時間は１時間弱となった。

⑵　手続き

グループ討論会に入る前に司会から、①３時限目の授業公開の内容に関わらず、日頃の保育科の教育全般について意見を出す、②ブレインストーミングの原則にのっとった議論を行う、③ＫＪ法を用いての検討を試みる、④問題解決を図るために「論理的に考える」ことを重視する、という旨の説明を行った。２つの手法については、立命館大学経済学部山井ゼミＨＰに掲載されている「ブレインストーミングとＫＪ法」の説明書[2)]を配布し、その手順通りに進行した。手順は以下のとおりである。

１）カードをバラバラに広げる

各自が普段、保育科の教育について困っていることや考えていることを付箋式カードに書き出した。今回はテーマを絞らずに、修学や設備環境等、「普段困っていることや問題に思っている、改善して欲しいこと」を自由に書き出すように司会から指示を出した。記入済みカードはそれぞれの班で模造紙の上に広げ、班のメンバーがすべての意見に目を通すようにした。

２）関連性のあるカードを重ねてグループ化する

付箋に記述された内容を読みながら、関連性のあるカードごとにまとめ、小グループを形成した。その後、小グループごとの「表札（小見出し）」を付けていった。

３）小グループから中（大）グループへ

小グループの「表札（小見出し）」ごとに、互いに親近性のあるグループを中グループにまとめる。あまりに中グループが多すぎた場合は、中グループ同士を関連性のあるグループごとにまとめ大グループを作った。

４）空間配置

グループ間の論理的関連性ができるように大グループのカードの束を並べ替え、論理的な思考を助ける空間配置を行った。

５）表札のはらわたを出す

いったん空間配置を終えた後、グループの記述内容を確認して、関連性のあるグループ空間配置を行った。

６）図解

カードの付箋機能を利用して空間配置を模造紙上に固定し、グループ同士の関連性がよくわかるように連結記号などを使って図式記号等を使って図式化した。その作業を通じ、課題の相関関係を論理的に理解できるように分析した。

７）評価

模造紙上にまとめた図を見ながら、すべてのグループのうちどれが重要であると考えるか、その順番を打ち、その改善案のアイディアを付箋に書いて貼り付けつけていった。

それぞれの班の意見を前述の手順でまとめ、最後に「研修のまとめ」として、出来上がった図を基に、それぞれの班の討論の内容を発表しあった。

３．討論のまとめ

今回の討論は60分足らずの短時間しか時間設定ができなかったため、十分な議論を尽くすことはできなかったが、出来上がった図を基に、２つの班でそれぞれ討論を行った。討論の内容をまとめたＡ班の図が写真１、Ｂ班の図が写真２である。

写真１　Ａ班の図

⑴　Ａ班の討論内容のまとめ

討論の時間が短かったためか、Ａ班は図解にまでは至らなかったが（写真１）、活発な意見の交換があった。討議で得られた意見は７つの小グループと３つの意見にまとめられた。

表１　Ａ班の討論内容のまとめ

	小グループのタイトル	内　　容
1	授業態度	・私語が多い　・言葉遣いが悪い　・ため口で教員に話す学生がいる ・TPO を知らない　・スマホ依存　・行動ができない ・注意や指導をすると「厳しい」と言う ・つめが長い。あれでは保育は無理。 ・グループで話をさせると同じ学生ばかり話をする ・単位だけもらえたらよいと消極的
2	能力	・成績の良い学生がおとなしい。リーダーの学生がいない ・明らかに発達障害の学生がいて対応に困る（原文ママ） ・同じ内容で説明しても理解の差が大きい ・勉強ができる学生とできない学生の差が大きい ・全く理解できていない　・参加できない学生が居る ・グループワークに入れない学生が居る ・一人でできない　・まずは集中して聞くことから ・集中時間が短い　・書くことが苦手　・一般常識が通じない ・板書を写せない。時間がかかる　・書くことが苦手 ・授業中じっとしていられない学生が居る
3	向上心がない	・図書館で本を借りない　・質問が出ない　・自分で考えようとしない ・自分で調べることが少ない　・調べる、考える、感じることが少ない
4	学習意欲	・ピアノができない学生で、実習の時にして下さいと園の先生に言われても、できないとすぐいう ・「来週は、、、」と言ったとたんに片づけて帰ろうとする ・大学に出てこない（家庭の事情、複雑）学生 ・保育を目指しているのかわからない学生が目だつ ・保育者になる自覚を持つ　・発言が少ない　・バイト命（原文ママ）
5	学生の長所	・内面の優しい学生もいる　・あいさつ、返事ができる ・体を動かす活動が好きな学生が多い　・明るく元気　・笑顔は良い ・子どもへのまなざしの柔らかさも持ち合わせているのでそれを伸ばす ・もっと大学生らしく大人になって

6	環境	・使いやすい教室（スペース）が欲しい ・学内のごみ箱をきれいなものにして欲しい ・教室が汚い　　・清掃人員を増やしてほしい ・研究室に虫が多い。くもの子がかえった。むかでが天井から落ちてきた ・研究室の換気扇をつけるとトイレのにおいがする ・会議室10号館カビのにおいが ・学内でのんびり時間を過ごす学生があまり目につかない ・コンビニ充実させて　　・学食とメニューと時間を改善して
7	教員サイド	・学生の情報共有　　・内容・方法 ・学生の方法がない場合があるので対応が遅れる ・マナーや受講態度等指導を統一する ・学生が存在価値をもつ　　・科目間連携 ・むずかしい、わからないですませるようにせず教科書や資料図書を読むことから始めることも大切に ・座学への興味も大切に　　・興味づけがむずかしい
	・卒後支援。リカレント教育	
	・決定事項は話し合い、説明は大切に	
	・らんぼうな面を前面に出さず、落ち着いて対応することが大切	

A班の討議内容は、表１のとおりである。A班では、得られた様々な意見を、①授業態度、②能力、③向上心がない、④学習意欲、⑤学生の長所、⑥環境、⑦教員サイドの７つにグルーピングして、それぞれの内容について意見交換を行っていた。④の学修意欲や⑥環境についての意見が多く出され、多くの教員が授業の困難さを感じていることが明らかになった。

今後の対策の優先順位は、①学生の長所、②教員サイド、③授業態度の順番であげており、まずは、学生の長所を見つけていき、科目間連携など教員サイドの工夫を行い、学生の授業態度の向上を図ることが大切である、とまとめた。

⑵　B班の検討内容のまとめ

B班の討論内容は表２のとおりである。B班では、大学の設備や学生の学修意欲や力などについて様々な意見が出た。また、問題解決のための話し合いでは、少数意見であった「保育科は頑張っている」という意見を最優先項目として、まずは学科教員が「自信をつける」ことを重視し、２番目に教員連携の項目を挙げている。

また、大グループ１「大学」内の小グループ３の「備品」については具体的な内容に「教室が汚れている」という意見が挙げられ、それに対して、「手作りゴミ箱」を設置してはどうか、という問題解決にむけた具体的な案が出るなど、建設的な意見が多く出されていた。

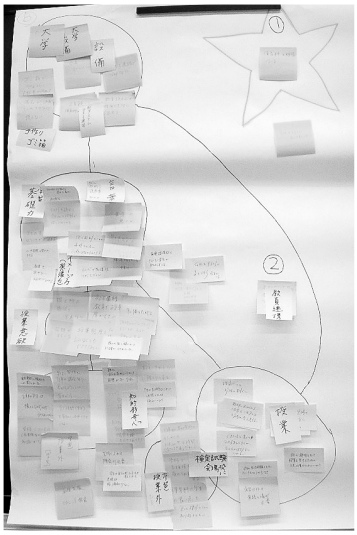

写真２　B班の図

表2　Ｂグループのまとめ

大グループのタイトル	小グループのタイトル	内　　容
1．大学	Ｓ１．大学設備	・大学設備　・学生と連絡がつかない　・タブレット
	Ｓ２．教学システム	・教学システムが信用できない（出欠）
	Ｓ３．備品	・備品が壊れていたり、少なくて使えない。 ・ゴミ箱が少ない（教室が汚れている）
2．タイトルなし	Ｓ４．言葉	・18～20歳で知っておくべき日本語を知らない ・言葉遣いの悪さ
	Ｓ５．イメージ力（想像力）	・他教科のことが再現できない（聞いてもわからない） ・視野が狭い ・具体的なイメージを持ってもらうことが難しい ・イメージや想像することが難しい
	Ｓ６．学習基礎力	・学生の基礎学力のばらつきがありすぎる ・学生の知的能力、学力に差がありすぎる ・小中学校の学びが不十分 ・板書を写せない、時間がかかる
3．授業意欲	Ｓ７．授業意欲	・提出物の期限が守れない ・早く帰りたがる　・宿題が嫌い ・授業態度を言わなくてもできて欲しい ・静かに座って聞くという訓練がなされていない ・初年児教育で授業態度とマナー
4．タイトルなし	Ｓ８．（学習）授業外（学生）	・資格免許に関することしか関心がない ・三部の学生は横のつながりが少ないようす ・資格についての（秘書検など）の知識がない ・空き時間（学生）を有効に活用できていない
	Ｓ９．知的好奇心	・学生に自分を高めていくという発想が少ない ・学生が知的なことに関心を持つにはどうしたらいいか？ ・すぐにスマートフォンに頼ろうとする
5．（学習）授業外（教員）	S10.（学習）授業外（教員）	・行事等の参加率向上のためにも、ＨＲ or ゼミの時間（全クラス共通）つくれたら ・学校で各種検定を受けられるようにする ・保育科の学生の良い点を伸ばす ・もっと課外のことに取り組ませたい
6．授業	S11. 授業	・授業ごとの評価が難しい ・教科に求められる内容を時間が全く足らない ・レポートを書かせたり、コメントまでは見るが、返却までいかない ・学生の生活経験（掃除、片付けなど）の少なさ ・実習以外の実践が必要 ・学生が興味を持って授業を受けるための工夫はどうしたらいいか？
7．教員連携		
8．保育科の教員は頑張っている		

4．考察

今回の研修会の中から様々な課題が浮かび上がった。①教学システムの改善、大学の設備の拡充など全学的な取り組み、②学生の意欲の向上、

③科目間連携や学生へのアプローチ方法などを中心とした教員間の連携など、が主な内容である。

現在でも教員各自では様々な努力をし続けている。そのような学科内の個人の様々な取り組みの情報を集約・整理し、データの分析結果を学科内にフィードバックする必要がある。現状ではそれらを集約するシステムや時間的余裕がないため取り組めてはいないが、アドミッショポリシー・カリキュラムポリシー・ディプロマポシー等を含んだ、入学から卒業までの間の経緯をデータで管理する必要がある。問題はどのように組織を編成して、何を得られるようにするかである。本学保育科は人的・物的資源が不足しているため、まずはできることから行っていくこと、人員不足はＩＣＴなどを活用して補うなどの工夫も求められる。

精神的に未熟な段階の学生に対する指導については、学科内の意思統一をして、同じような姿勢で関わることで、学生の混乱が減少することもある。そのためにも、学科全体の研修会の機会を設け、学科内で学生指導の方針の意思統一をしていくことは大変意義深いこととなる。

金子（2008）は、現代の大学職員に求められるのは、大学全体がどのような課題を抱えているかを考えるための幅広い視野、大学がどこに向かつていくのかという方向感覚、そしてそれを具体的な業務に結びつけていく知恵ではないか[3)]、と述べているが、これは本学のような小規模大学の教員にもあてはまることである。小規模大学では、教員が、自身の担当以外の教務事務、キャリア教育など学科の運営に携わることも多い。学科全員が共通理解を持って、わがごととして学科の業務に取り組むことが、学生の「質保証」にとっても大切となる。

今回明らかになった課題を改善していくため、ひいては学科の教育力を高めるためにも、今後は、教員の作業を可視化していき、学科内で連携できるようにしていくべきである。そのためにも、教学システムを効率よく活用できるよう、関係部署とも連携を密にする必要がある。そして、個々の教員の努力のデータを蓄積し、各自の努力を互いに参考にできるような体制を構築していくことが大切である。

今回の研修では、十分な時間を設定することができなかったため、深い討議にまでは踏み込むことができなかった。

また、修学に困難さを抱える学生への学修に関わる合理的な配慮については意見が少なかったため、彼らに対する保育科の専門教育の具体的なあり方にまで触れる時間がなかった。合理的配慮の事例など、個別の実践で得られた知見を学科で共有できるような修学支援体制や、初年次教育、キャリア教育など問題は山積している。今後は研修を定期的に行い、具体的な解決方法を模索していく必要がある。

まずは、次年度の授業改善を目指し、年度末に実施される講師懇談会では、教員間・科目間の連携が取れるようなプログラム作りから始めていきたい。

〈引用文献〉

１)厚生労働省　2014　保育人材確保のための『魅力ある職場づくりに向けて』
https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11601000-Shokugyouanteikyoku-Soumuka/0000057898.pdf（2020年１月８日検索）

２）山井敏章，ブレインストーミングとＫＪ法，立命館大学山井ゼミホームページ
http://www.ritsumei.ac.jp/~yamai/kj.htm
（2020年１月８日検索）

３）金子元久　2008　「大学職員の展望」，『IDE 現代の高等教育』No.499　pp10

〈参考文献〉

川喜田二郎，1967，発想法，中公新書

福田規秀，柳楽節子，佐竹邦子，杉田律子，山川博史，2014，兵庫大学短期大学部保育科の現在の課題と展望，兵庫大学短期大学部研究集録，48，pp.21-29.

日本発達障害連盟編，2019，発達障害白書2019年版，明石書店